

コミュニティへの映像の沈着

——魚沼市のガラス乾板を事例として——

新潟大学 原田健一

1 目的

この報告の目的は、近代以降、欧米でつくり出された洋物である写真（映像メディア）が、いかに日本社会—地域社会へと普及したのか、あるいはどう人びと—地域住民は日常生活で移入された映像をどう理解し、活用しようとしたのか、イノベーションの普及過程の研究と流行研究の理論枠組みを援用し、メディア研究としてだけでなく、時間軸を組み込むことで歴史学、また空間軸を取り入れることで、地域研究、民族学／民俗学研究といった領域の研究をも重層的に織り込み、分析する。

2 方法

そこで、データとしては幕末に南魚沼市六日町で自ら撮影技術を習得し、芝居仲間を撮影した地域名望家の今成無事平・無為平の湿板写真、さらには大正時代に同じく六日町で写真を撮影した高橋捨松のガラス乾板写真を参照しつつ、新たに発見された—魚沼市に寄贈され長いこと倉庫にねむっていた明治後半から大正時代に小出町の写真館で約20年にわたって撮影された肖像写真約7500枚をデジタル化し、その内容、ならびに、その社会的文脈を分析した。

3 結果

分析の結果、映像メディアは都市の支配層・富裕層から都市の下層へと普及したというより、地域の支配層・富裕層へと普及した。特に、幕末から明治・大正にかけて、中山間地域がグローバルな流通・経済経路とつながっていたこともあり、西洋の新たな技術として、いち早く取り入れられた。そして、こうした地域の上層から、一般の住民へと普及するにあたって、自ら撮影機を持ち得ない人びとは写真館で、映像を利活用しようとした。ところで、その写真内容は中山間地域の複雑な社会的文脈を反映し、顕在化する。その映像の社会的特徴は、①グローバルな流通経路にあることから、当時、輸出されていた横浜写真の様式を援用し、自らもそうした写真を生産していた。つまり、そうした写真を輸出していた可能性がある。②村の人びとは、写すものとして聖なる儀礼や祭りを写すのではなく、地芝居などの遊びの領域の村の共同規制のゆるい祝宴の映像を残そうとした。このことは、支配層・富裕層のみならず一般住民においても共通し、映像が何より遊びの領域として意識されていた。③また、写される人びとは人生の晴れ舞台として、男性は自らの職業を表すような服装をし、ポーズをとるだけでなく、自分の考えや意識、イデオロギーなどを表現しようとする。女性は、一人の場合より、二人以上のことが多く、その関係性を写そうとしている。つまり、ジェンダーによって、映像によって表現するものは異なった。どちらにしても、人びとは遊びのなかで自らの存在を主張した。

4 結論

ジンメルは流行論において、流行は上流から下層へという階級を媒介とし、さらに模倣（同化）と差異化の間で形成されるとした。しかし、その同化と差異化は地域の政治・経済的な構造だけでなく、文化的な風土も基盤としており、複雑で多層的なものとして表現される。映像は社会における同化と差異化を活発化し、内包していた社会的矛盾を拡大することで、社会変容の一要因へと転化する。

文献

ジンメル, G 1976 円子修平, 大久保健治訳『ジンメル著作集7 文化の哲学』白水社